

「ゼミの神大」の伝統と現在 ～ゼミ誌《PHILOSOPHIA》の記録

伊 坂 青 司

神奈川大学の教育の伝統の一つに、ゼミナール制度がある。私が神奈川大学に赴任してきた1984年当時は、学部を超えたゼミナールが花盛りで、いわゆる学部内の専門科目ではなかった。ゼミナールは学部内にクローズドされた専門科目というのが一般の大学の常識であったので、神奈川大学のゼミナール制度はむしろ特異なものであった。「ゼミの神大」は、こうしたゼミナールの特徴を表す名称であり、また学外にも広く知られていた。

神奈川大学のゼミナールは、当時は三年次と四年次の学生が履修するという配当年次があり、法学部、経済学部、外国語学部、工学部の四学部の学生が、まさに学部横断的にどの教員のゼミナールでも履修することができた。募集の時期になると、学内にゼミ生募集の掲示が競って張り出されて、華やかな宣伝合戦の様相を呈していたものである。各学部の教員のみならず、全学の教養教育担当の教員（ほとんどは当時の外国語学部に所属していた）もまたゼミナールを担当できることになっており、そうした事情が、学部横断的な「ゼミの神大」の特徴を形づくっていたわけである。

伊坂ゼミナールも、私の所属する外国語学部のみならず、法学部や経済学部、時には工学部の学生が属していて、まさに学部横断的なゼミナールであった。ゼミナールでは「現代と人間」という巾広いテーマを設定して、ゼミ生はそれぞれに現代的なテーマを自由に選べるようにした。ゼミ生は

最初のうちは自由なテーマ設定に困ったようでもあったが、ディスカッションをしていくなかで次第にテーマを絞り、ゼミ論文の執筆へとつなげていった。ゼミのスタイルは、各自がプレゼンテーションをして、全員でディスカッションをするというもので、さまざまな問題がテーマとして採り上げられた。

伊坂ゼミナールは、二年間のゼミナール活動の成果として各自が論文を執筆し、それをゼミ誌《PHILOSOPHIA》として継続して刊行してきた。第1号が1987年度で、2018年度で第30号を迎えた。途中で私の一年間の在外研修により発刊できなかった年度もあったが、ほぼ毎年刊行したことになる。(基本的に各号は研究室に保管してきたつもりであったが、研究室に見当たらなかった号については、神奈川大学資料編纂室の助力により、全号の目次を網羅することができた。)

各号の目次を概観してみると、共通しているのは学生の若者らしい関心であり、またその時代に根差した問題意識である。それぞれの論文は、時代がぶつかっていた問題を敏感に反映しているし、また若者らしく時代を先取りするテーマに挑戦して取り組んでいることが分かる。ゼミ誌に論文を執筆した一人一人のゼミ生は、大学生であった時期にどのような日本を経験してきたのだろうか。ここでは、ゼミ誌の各年度の論文のテーマを列挙しながら、併せて学生たちを取り巻いていた時代状況を概観していきたいと思う。そうすることで、日本社会が直面した問題の歴史の変遷もまた見えてくるはずである。

日本の高度経済成長期は1970年代半ばには終息している。それから約10年後の1985年には、筑波研究学園都市で国際科学技術博覧会いわゆる「筑波万博」があり、日本の科学技術もIT化の時代に入っていた。しかし他方で、同年に日本航空123便墜落事故により、科学技術の粋を集めた航空機にもリスクが潜んでいることが改めて認識されることにもなった。

翌 1986 年にはソ連のチェルノブイリ原子力発電所で爆発事故があり、放射能汚染の不安が世界を覆った。日本でもすでに原子力発電への依存度が高まりつつあっただけに、この原発事故によって、原子力発電の危険性に対する不安が、日本人の意識のうちにも内在してゆくことになる。

1987 年には携帯電話サービスが開始となり、まだ学生のなかには広がってはいなかったものの、通信手段の個体化とその後の普及が急速に進んでゆく。他方で、1989 年には女子高生コンクリート詰め殺人事件といわれる複数の少年による凶悪な犯罪が起きて、女子高生の監禁されていた家の家族と少年との関係から、現代の家族のあり方にも衝撃を与えた。また 1989 年末をピークに株価が急落に転じて、一時的な日本経済のバブル状態が崩壊し、その後長期にわたる日本経済の低迷へとつながってゆく。

こうした現代文明に潜む問題を経験してきたゼミ生は、どのようなテーマを設定して論文を執筆したのであろうか。

創刊号（1987 年）

フロイトの『夢判断』／ユングの心理療法／犯罪の精神分析／心に潜むナルシス／時代の産物ヒーロー／暴走族の心理と行動／ライフワーカー—現代若者考／現代日本の精神分析／「日本を見る」—国際人になるために／全てはパラドックス／ジェイムズのプラグマティズム／「死」と生命倫理

第 2 号（1988 年）

美より一世紀末芸術の誕生／死生観—一人は何故生きるのか／祭りについて／闇にとりつかれた人々／23 年を経て—旅の考察—／自立を求めて／現代物理学のもたらした科学革命について

第 3 号（1989 年）

解説・日本誤解論／現代日本考／現代アメリカの個人的考察／記号論

の森／豊かさの再考について／大衆の持つ危険性／多様性のユートピア／ガラスケースの中の非常識／汝自身を知れ／ソナチネ

創刊号には、現代日本と自己の問題を精神分析の手法で解明しようとするゼミ一期生としての意気込みを感じることができる。第2号には現代の科学革命についての論文が目につくし、第3号に日本論、日本人論が見られるのは、改めて高度経済成長後の日本を、そして日本人のあり方を問うという問題意識が見られる。それは、アメリカに実際に旅をして、先進国アメリカから日本や日本人を再認識するという論文にも、同じような問題意識が現れている。また日本の豊かさを問題にした論文も、高度経済成長によってもたらされた豊かさの矛盾の見え始めた日本を、距離感を持って見ようとするものである。

伊坂ゼミナールの中心的なテーマに、人間関係とりわけ〈愛〉を設定する伝統は、第4号あたりから始まる。

第4号（1990年）

愛、そして結婚／おんな／母親との接点を求めて／日本人を考える／日本人の企業観／日本人の中の縁側／都市論／緑の中のオアシス／文化遺産としての音楽／テクノ・ドラック不感症／BETWEEN SUN AND STAR

第4号では、女性論をテーマにした論文が目立つ。愛とか結婚といったテーマは、女性の社会進出に伴って、女性のゼミ生が主導的に考察している点で特徴的である。こうした傾向は、1986年に男女雇用機会均等法が施行され、女性の社会進出に伴う女性としての社会的立場や、同時に結婚に伴う出産・育児といった問題が改めて考えられるようになったことを反

映しているであろう。こうした問題を考えることは、男性よりも女性主導で進行しており、むしろ男性の意識の遅れと裏腹である。すでにここに、「草食系男子」という近年のキーワードによって表される現象が先取りされているようにも思われる。

1990年代は、地球の環境問題がクローズアップされた時代である。とりわけ温室効果ガスによる地球温暖化は、異常気象や海水面の上昇などの原因として話題になり、ゼミ生もまたそうした問題に敏感に反応している。

第5号（1993年）

映像問題は家庭から／コメの自由化とその問題点／地球の環境破壊について／水について／自動車を取り巻く環境と問題／誰もがみなハゲるのである／自分らしく生きる／AIDSについて考える／恋愛理想論者の他愛ない戯れ言

第5号には、環境問題が複数の論文で採り上げられている。地球環境、水、自動車による大気汚染など、環境問題は学生にとっても、自分たちの将来に関わる大きなテーマとして自覚され始めたことを物語っている。1997年に地球温暖化防止のための「京都議定書」が採択されることになるが、論文はこうした国際的な動向を敏感に反映しているといえよう。

1994年のゼミ誌から、高齢化社会をテーマにした論文が見られるようになる。国際的な統計に基づいても、すでに1990年あたりから高齢化率（人口に対する65歳以上の割合）が徐々に上昇し始めて、1993年あたりからその上昇率が高くなってゆく。先進国のなかでも日本は高齢化率がすでにトップであるのだから、高齢化社会の問題は、日本の若者にとっても関心の対象にならざるをえない。それは自分の親の世代の介護の問題であるとともに、将来の自分たち自身の問題にもつながってゆく。

第6号（1994年）

美人論／いまどきの男女論／夫婦別姓について／高齢化社会と在宅ケア／天国と地獄—死生観について—／生死観—脳死問題にふれて—／現代社会における死の問題／LIVING WITH WATER／経営者能力／日本のスポーツ 1994年度版

第7号（1995年）

「いじめ」根絶のために／「日本人」について／金八先生論／学校歴と班の関係／経済と人間の共生関係／21世紀の高齢化社会／向き合っている人たち／食品添加物について／21世紀の超大国／坂本龍馬の経済観念／スポーツビジネスについて／会計事務所におけるMAS業務の構築について

第8号（1996年）

現代家族のスケッチ／現代家族の憂鬱／現代の子供事情／うつと上手に付き合う／死を見つめること／高齢化社会を迎えるにあたり／とある若者にとってのリアルについて／日本人的行動の由来／日本人の軍事観について／現代の中で働くということ／情報と人の心／「いじめ」について考える

第9号（1997年）

現代ニッポンの結婚と性を斬る！／家族たちの現在／アダルト・チルドレンと家族／日本に生まれて／日本人と清潔／民意—住民の政治参加を考える—／社会のなかの障害者／高齢者をとりまく環境について／現代人とストレス社会—音のある暮らしの中で—／螺旋状の人間考／現代人と神の存在—幸福とは何か—／ジプシーの民族差別／一週間／地球と文明—私たちにできること—

1997年に臓器移植法が成立するが、それに先立って行われていた「脳

死臨調」における議論、すなわち脳死は人の死であるかどうかという議論が、すでに国民の間で脳死と臓器移植について大きな関心を引き起こしていた。第6号で脳死問題から死生観や現代社会における死の問題がテーマとして選ばれていることは、そうした議論に敏感に反応したものである。

また同じ号で夫婦別姓の問題が採り上げられているが、これも日本の家族制度をめぐって議論になってきたテーマで、1996年にはそれまでの議論を踏まえて、法制審議会が選択制夫婦別姓制度の答申をすることになる。論文はこうした動向を見越して夫婦別姓の問題を論じている。しかしいまだに夫婦別姓の問題には決着が付けられていないことをみると、日本人の家族意識に潜む家意識の根深さと男性中心の家族意識に、改めて問題の深刻さを見る思いがする。

時代が少々前後するが、1994年に松本サリン事件が起こり、また1995年には地下鉄サリン事件が起こって、オウム真理教による無差別同時多発テロ事件であることが分かった。首謀者の松本智津夫を始め、共犯信者が逮捕されたものの、オウム真理教は形を変えて生き延びている。こうしたカルト集団が宗教者や科学者にまで信者を拡大し、また少なくない若者の心を捉えたのは、現代文明に潜む不安や家族を始めとする共同体の解体といった現代社会の病理があると考えられる。1998年の第10号には、カルト集団と若者の心理を扱った論文が登場する。

さらに、1997年の神戸児童殺傷事件（酒鬼薔薇事件）は、残虐な少年犯罪として社会的に大きな衝撃を与えた。その衝撃は、殺傷事件を起こした少年の心理の不可解さによって増幅された。すなわち明確な理由もなく他人を殺傷することの狂気は、一人の少年の異常さのみ起因するのではなく、現代社会に適合できない普通の人間の深層心理に潜んでいるのではないかという、そういう身近な問題として突きつけられた。この頃から殺人や死のテーマが論文に少なからず採り上げられるのも、そうした現代社

会の病理と無関係ではないだろう。

第10号（1998年）

メディアと人／近代美人論／女から見た現代～男女関係のあり方～／
彼女たちと家族／結婚観と婚姻に関する法制度の変遷／THE
BEREAVED FAMILY—FACING DEATH—／カルト集団と若者の
心理／沖縄問題に見る日本の姿

第11号（1999年）

快楽殺人と精神鑑定／ドメスティック・バイオレンスの恐怖／先入観
と社会的事実～なぜひとは騙されるのか／働く女性と家族／競争教育
／人が人らしく死ぬために～尊厳死問題を考えて／死～死の定義と死
後の概念／人間（日本人）の死に場所／虚像～積極的に死を見つめて
今を生きる／地球温暖化問題／出生前診断／性同一性障害／現代の生
殖技術（人工授精や体外受精）から生じる倫理的問題

第12号（2000年）

人間的平等を目指して／自己と他者／心の病とお薬について／情報に
操作される人間心理／リアルとは何か／競馬（サラブレッド）の魅力
／遺伝子をめぐる諸問題／死をみつめ、生を考える

1999年の第11号から、出生前診断、人工授精や体外受精といった生殖補助技術、そしてそれに関連する生命倫理の問題がテーマとして浮上してくる。また第12号に掲載された「遺伝子をめぐる諸問題」は、注目されつつあったヒト遺伝子（ヒトゲノム）研究に反応した論文である。遺伝子をめぐる問題は、生物学や医学のみならず、遺伝子工学として科学技術と結びついて浮上してきた。ヒトの遺伝子については、アメリカ主導で「ヒトゲノム計画」が進められ、2000年の6月にヒトゲノムの構造がほぼ解

析された。種としての人間の遺伝子が、他の生物、とりわけ類人猿とどう違うのか、あるいは人それぞれの遺伝子がヒトとしての共通した遺伝子からどのように差異化されて諸個人の個性を形作るのかなど、ヒトゲノム研究には多大な期待が寄せられてきたのである。また遺伝病の遺伝子構造がどうなっているのか、遺伝子病の治療はどの程度可能なのか、さらには遺伝病の発症を抑制する薬の開発はどこまで可能なのかなど、医療にかかわる大きなテーマになってきた。こうした動向に応じて、その後も遺伝子操作や現代医療に対する生命倫理の問題は、ゼミ誌の論文の大きなテーマになる。

ところで男女の恋愛や家族愛の問題が、伊坂ゼミナールの一貫したテーマになっている。その背景には、解体しつつある家族の現状、そこから生じる少年犯罪などがあり、現代における愛の可能性は、ゼミ生に共通した問題意識をなしている。

2001年には大阪教育大学附属池田小学校で、小学生無差別殺傷事件が起きた。犯人の男性は幼少の頃から母親から育児をネグレクトされ、家族に対して強い不満を持つ反面、エリート家族には羨望と妬みを懐いていた。親子関係が壊れ、基本的な親子の愛の感情の欠如によって、それが殺人への動機になったりすることがある。この事件は、日本の親子関係や家族のあり方、ひいては自己と他者の関係という根本的な問題を考えるきっかけにもなった。ゼミナールでも親子関係や家族をテーマにディスカッションする機会が多くなり、また殺人を犯す心理についてもゼミ誌で採り上げられることにもなった。2001年から2004年にかけてのゼミ誌は、そうしたゼミでのディスカッションが論文執筆につながった。

第13号（2001年）

幸福らしきもの／感情論／スポーツ分野におけるリーダーシップ論／

青少年のコミュニケーションとその自画像／宗教による女性の自由規制／LOVE OR LUST／家族愛—明るい未来の家族と社会のために／愛のメタモルフォーゼ—依存と自立／男と女の違い／頭で食する日本人／生命とこころ／社会福祉の今後／シックハウス症候群

第14号（2002年）

愛／Do I Love me?—No, I Don't.／未婚者からみた結婚／人間形成論／自己と他者、そしてその心／社会システムの変容がもたらす「引きこもり問題」／社会問題と人間関係、信頼関係／生きる意味への思索／認識と意味と存在／FITTER, HAPPIER／あなたは騙されている！

第15号（2003年）

日本人への警鐘／日本の植民地支配に対する歴史的認識／靖国神社の公式参拝の是非について／マスメディアと情報操作／引きこもり形成と社会復帰／育児教育／不妊症を知ること／不妊治療と人工妊娠中絶／日本人男性の家事と育児／死と対象喪失／「死」をめぐる問い／安楽死

第16号（2004年）

結婚と恋愛／「親」という存在／現代の若者／少年犯罪と心理／性同一性障害者が暮らしやすい社会にするには？／依存／遺伝子がもたらすもの／未来へ／戦争論／「殺人」をしないという哲学／我は個にして全、全にして個

第15号には、日本の歴史認識や靖国問題が、また第16号には戦争論がテーマとして採り上げられ、日本の右傾化への危惧を反映している。

2005年から2008年のゼミ誌の論文テーマを見てみると、自己を視点にして人間関係をテーマにした論文の比重が大きいことが分かる。人間関係

におけるコミュニケーションの意味、恋愛の心理、親と子供の関係、ジェンダー論、宗教と若者、さらには生命倫理や環境倫理など、伊坂ゼミナールらしくさまざまな角度からアプローチがなされている。

第17号（2005年）

感情と涙／人間社会におけるコミュニケーション／読書とは／人生において価値あるもの／作られた価値・価値観／信じる／疑問／県民性とは／ラテンアメリカの子どもたち

第18号（2006年）

血液型と性格／恋愛における心理分析／夢と心理／ファッションにおける自己表現／人と何かのつながり／自己開示と自己呈示による人間関係の境界について／いずれは親となるであろう自分／現代社会における若者／宗教と現代日本

第19号（2007年）

組織の現実的限界と可能性／血液型と性格／環境と対人関係における人格形成／ペットロス／恋愛という名の症状／出生前診断／スポーツと人／ファッションと色による心理作用

第20号（2008年）

スポーツの効用／血液型と人間／星座と人間の運命／恋愛はどこまで人間のか～人間と動物の違い／「プライドと偏見」と「ブリジットジョーンズの日記」映画比較／作られた社会的性差～ジェンダー論の死角／代理母／メス化する自然と子供たちを取り巻く社会環境の変化／遺伝子はどこまで人に影響を与えるか／地球温暖化と環境哲学

ところでその後、神奈川大学のゼミナール制度の特徴であった学部横断的履修が大きく変わることになった。それには、次のような事情が関わっ

ている。それは初年次教育（FYS）の全学的導入に伴って、かつて三年次から開講されていたゼミナールを、初年次からの継続として二年次から開講してほしいという学生からの要望もあって、学部・学科によっては二年次から開講する方向に移行していったということである。しかし、ゼミナールの二年次開講のために、一年次の秋にはゼミナールの仮決定をしなければならず、今度はそれでは早すぎるという不満が学生や教員から出始めて、学部によっては半年繰り下げてゼミナールを開講するケースが出始めた。外国語学部のなかでも、それまでのように三・四年次にゼミナールを開講する学科もあれば、2007年に新設された国際文化交流学科のように二・三年次に開講する学科もあるというように、必ずしも足並みがそろっていたわけではない。

この国際文化交流学科の新設によって、外国語学部のゼミナールも大きく変化することになる。これまで教養教育の担当者であった人文系の教員が、教養科目と併せて国際文化交流学科の専門科目も担当することになった。しかも国際文化交流学科では当初から、初年次後期の基礎演習からの連続性を持たせることを重視して、二年次からゼミナールを開講することにした。それに伴って、人文系教員のゼミナールは外国語ゼミナールとして従来のように他学部にも開かれてはいるものの、実際には国際文化交流学科の学生にほとんど限定されたものになり、それまでの学部横断的なゼミナールの性格が自ずと変化することになったのである。伊坂ゼミナールもまた、私の所属する国際文化交流学科の学生の割合が圧倒的に高くなり、そこに外国語学部内の他学科の学生がわずかに入ってくるという状態になった。

その結果、2010年のゼミ誌から、国際文化交流学科の学生を主体にした論文でほぼ占められることになった。ゼミナールの統一テーマも「文化と人間」と改め、文化のなかでも芸術を核にして、文化の国際比較をする

ことを趣旨にした。時代は古代から現代まで長いスパンで設定し、その意味では歴史的な文化比較という意味もあわせて持つようにした。こうして2019年度までに至るゼミ誌の内容は、以下に見るように、広く文化と人間をテーマにして、しかも芸術を核にしたきわめて多彩なものになった。その反面、従来の「現代と人間」を統一テーマにしていた時の現代的な社会問題のテーマが前面に出なくなったことは否めない。

第21号（2009年）

クリムト絵画と精神分析／女性の美の概念とその変化／性の商品化／男心と乙女心／男と女の心模様／異性の親との関係—エディプスコンプレックス・エレクトラコンプレックスについて／働く女性のキャリアデザインについて／余命宣告された人たちの生き方について

第22号（2010年）

ギリシア神話からみる人間性—感情表現の豊かな神々たち—／美の脱神話化／都市建築の比較文化—ヨーロッパ南北より—／オランダ風景画／女性美の比較文化／女性美の変遷について／奇術史—上手な手品の使い方／ゴスペルの文化史／女性の幸福

第23号（2011年）

キリスト教宗派と絵画表現—絵画表現に見る各宗派の教義／シンボルの西と東／レオナルド・ダ・ヴィンチ—三枚の絵に託されたメッセージ／ヨーロッパ・ロマン主義—イギリスとドイツの絵画比較／西洋絵画から見る日本絵画の美—日本人の精神／江戸っ子—江戸庶民の生活と精神／かわいい・Kawaii—子ども文化と大人文化の境目／Gospelで日本人に癒しを

第24号（2012年）

クロード・モネと印象派—美術とは何か？—／日本絵画と西洋絵画か

ら見える死生観の文化比較／ピーテル・ブリューゲルとフランドル／
 水墨美術 山水画の文化比較—牧谿と日本の水墨山水画／日本におけ
 る「かわいい」とは？／オランダ黄金期—静物画と風景画—／古代エ
 ジプト人の死生観／岡本太郎と祭り—人間にとって祭りとは—／イン
 ドの結婚—光と影—／芸術とまちおこし／ヒトと神話／ポール・ポト政
 権とカンボジア文化の衰退

第 25 号 (2013 年)

ビアズリーとアラステアから見る世紀末芸術と挿絵／ブリューゲルと
 諺／オランダ黄金時代を生きたフェルメール／浅井忠と菱田春草から
 見る明治美術／インドの宗教／ゴッホとゴーギャン／ルイズ・ヴィ
 ジェ・ルブランとフランス宮廷／子供たちに込められた想い—奈良美
 智の歴史から—／海外に渡った日本美術／世俗化する裸婦／日本の妖
 怪図／モネとジャポニスム／静物画の東西比較

2014 年度から私は、ゼミナールの他に専門科目のうち三年次配当の専
 門演習Ⅱ（学生は「準ゼミナール」と呼んでいる）を開講したために、学
 生がその両方に分散することになり、2014 年と 2015 年のゼミ誌は、ゼミ
 ナールの論文と併せて専門演習Ⅱの学生の論文も掲載することになった。
 専門演習Ⅱの統一テーマは「愛の比較文化論的研究」で、伊坂ゼミナール
 の一貫したテーマであった「愛」を核にしている。その意味では、専門演
 習Ⅱという名前こそゼミナールではないが、伊坂ゼミナールの伝統を受け
 継ぐものではある。

第 26 号 (2014 年)

受胎告知を通してみるルネサンス／アメリカにおけるポップアートの
 存在／ロココ時代の絵画／「かわいい」文化の発展と受容

《愛の比較文化論的研究》

支配や束縛をすることは愛といえるのか／同性愛について考える／自己愛／人を好きになること／人はなぜ結婚するのか／浮気の動機／結婚と恋愛感情

第 27 号 (2015 年)

モネ～瞬間をとらえた印象派～／「ゲルニカ」～パブロ・ピカソと闘牛～／ジャン＝ミシェル・バスキア／夢窓疎石と日本庭園／マグリットの生涯とイメージ

《愛の比較文化論的研究》

「愛」とは何か／結婚観の変化／ドメスティック・バイオレンス／国際結婚／対物性愛にみる性倒錯／私の頭の中の消しゴム／友達以上恋人未満な関係／男女間の友情／遊女の恋とは如何なるものであったか／愛情表現の違い／恋愛で年齢差は関係あるのか／結婚と恋愛に関する意識の差／好きと愛の違い／「危険」な恋

第 28 号 (2016 年)

情熱の画家・不遇の画家—フィンセント・ファン・ゴッホ／ピカソ—女性遍歴からみる作風の変化／キリスト教・仏教における死生観—往生要集とキリスト教の天国と地獄／マネエリスム／日本を描いた外国人画家—ロバート・フレデリック・ブルームが見た日本／日本画の影響を受けた西洋の画家／オーギュスト・ロダンとカミーユ・クローデル／挿絵からみるグリムの世界／イシス信仰と聖母マリアの誕生と変遷

第 29 号 (2017 年)

ピサロと風景画／日本の文様～家紋・神紋～／ロシアにおけるバレエ／岡本太郎のメッセージ／ロマネスク建築とローマ人の暮らし／ジャン＝ミシェル・バスキアの生きた跡／偏執狂的シュールレアリスト—

サルバドール・ダリ／「すみっこぐらし」から見るパーソナル・スペース／Claude Monet—絵画の役割とモネが求めた癒し／ロココ／エドワード・ゴッリーの不思議な絵／バロック期からロココ期へ／ロマン主義／さまざまな形の日本芸術／印象派と新印象派

第30号（2018年）

ガムランとオーケストラの比較／龍とドラゴン／日本刀が守るもの／木島櫻谷と動物画／エッシャーとだまし／革命と芸術の時代のロシア／伊藤若冲と円山応挙／ウジェーヌ・ブーダンについて／菱田春草と朦朧体

国際文化交流学科の学生を主体にしたゼミナールと専門演習Ⅱ（準ゼミナール）によって、それまでの学部・学科横断的なゼミナールの特徴は影が薄くなったようにも思われる。しかし私のゼミナールとして受け継がれてきたのは、自分の問題意識から出発して、自己と他者の人間関係へ、そして現代の諸問題への関心を持って異文化にアプローチすること、さらにさまざまな芸術のなかに人間のあり方を読み解くこと、そのような方法である。こうしてゼミ生は、ディスカッションを通してゼミナールのなかでお互いに刺激し合い、共通認識を形成してゆく。伊坂ゼミナールが一貫して方針としてきたのは、ゼミ生が一人一人それぞれの問題意識を持って、ゼミナールとして時代と切り結んだディスカッションをすることである。そうしたゼミナール活動の伝統と成果が、継続して刊行されてきた学生主体のゼミ誌《PHILOSOPHIA》ということになる。

（付記 本稿は『神奈川大学史紀要』創刊号の論稿に、その後発行されたゼミ誌の目次を追加した改訂版である。）